

令和6年度英語授業改善協力校事業に係る公開授業および授業研究会

本事業は、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業実践を県内に広く普及する目的で実施しています。

本年度は、栗東市立金勝小学校および東近江市立玉園中学校に御協力いただきました。

各協力校では、年3回の公開授業および授業研究会を通して、継続的に授業改善に取り組んでいただきました。

Vol.6の[小学校]編に続き、今回は[中学校]編の紹介です。

年間の流れ

・テーマ決定
・テーマに沿った授業実践
・校内公開授業および授業研究会
(5月)

・テーマに沿った授業実践
・市内公開授業および授業研究会
(10月)

・テーマに沿った授業実践
・県内公開授業および授業研究会
(11月)

テーマ

「子どもたちが自分の思いや考えを伝えるための『書くこと』の指導～言語活動を通した指導の充実～」

5月

テーマ決定㊦

玉園中学校の授業者である、A教諭の1回目の公開授業後、校内の英語の先生方と共に授業研究会を行いました。

協議では、日々の授業実践の中で感じておられる課題についても言及していただきました。協議を経て、先生方が共通して、生徒の英語による「書くこと」の力を育成したいと願っていることが明らかになりました。

「どのようにすれば英語を書く力が育つだろうか」と議論された結果、「書けるようにするために、まずは英語でのやり取りを充実させ、英語で話せるようにしていこう」、「書くことを目的にするのではなく、書いた先に何があるか、何のために書くのかを生徒がイメージできるようにしていこう」という方向性が決定されました。

Key Takeaways for Enhancing Writing Skills

- 書く目的を明確にする
 - ・「何のために書くのか」を生徒と共有する。
- 書く前に話す
 - ・「話した内容を書く」ことで、アウトプットを繰り返す。書く内容を明確にすることで書くことができる。

10月

実践継続中㊦

A教諭による2回目の公開授業を、東近江市内の小・中学校で英語を担当する先生方が参観されました。

授業研究会では、授業を基に協議を行い、「どのように生徒の書く力を育成するか」について3つのことを確認しました。

- ①どのような「書くこと」の力を目指しているのかを明確にする。
→「CAN-DOリスト(令和4年度改訂版)」で確認する。
- ②生徒が自分の力で英文を作成できるような指導を行う。
→学習状況を見取り、学習段階に応じた指導を行う。
(例)・既習事項を活用して書ける話題にする。
・ICTを効果的に活用し、書いた英文を共有する。
・生徒とのやり取りを通して、中間指導を行う。
- ③生徒が自分の力で正確に英文を書くことができるようになったか、を見取る。
→徐々に言語面における正確性を高められるようにする。

授業研究会の後半には、玉園中学校の英語主任である辻川先生が、御自身が実践中の取組を紹介してくださいました。

生徒の書く力を高めるために、皆で明日からの実践を考えることができ、充実した授業研究会になりました。

県内から多くの先生方にお集まりいただいたことで、充実した公開授業および授業研究会になりました。

単元名：単元名
Unit6 Research Your Topic
『New Horizon English Course 2』東京書籍

単元の目標
12月に神戸を訪問するB先生のために、校外学習で訪れた神戸のおすすめの場所や食べ物について、クラスメイトに調査したアンケート結果を基に、自分の思いや考えを含めた「神戸のおすすめレポート」を、書くことができる



A教諭とB先生(ALT)のTTの様子

Key Takeaways from Mr.Inoue's English Lesson.

○英語で授業を行う

- ・ A教諭は、日頃から英語で授業を進めています。そのため、生徒たちは、英語を聞くことに慣れており、A教諭やB先生の話す英語を即座に理解し、活動していました。英語の授業では、教科書本文の音声をデジタル教科書等で聞く際や、教科書等のリスニング問題を解くとき以外にも、多くの英語を聞くことができる環境にあることが大切です。授業者による英語のインプットの積み重ねが、生徒たちの英語の力を育成することにつながります。

○ICTを効果的に活用する

- ・ A教諭は、padlet(アプリ)を活用して、各生徒が書いた英語を、学級全体に共有していました。生徒たちは、互いが書いた英語を読み、自分が書く際のヒントにしていました。即時に可視化、共有化できるこのようなツールは、英語の指導を効率的にするものです。

○ALTと共に中間指導を行う

- ・ 生徒が書いた英文をよりよくするための中間指導をALTのB先生と共に行っていました。生徒が書いた誤りのある英文について取り上げるのはA教諭、どのように修正するかはB先生が行っていました。ALTの視点を交えた「書くこと」の指導を通して、生徒は、英語の文化的背景を踏まえた表現の適切さ等について関心をもったり、表現の細かなニュアンス等について気付いたりします。指導にあたっては、ALTと指導のねらいを共有しておくことが大切です。

参加者からの感想

- ・ 正確性を高めることは、教員と生徒間のやり取りだけでなく、タブレット端末や電子黒板を用いることで、より効率的にできると思いました。タブレット端末への文字入力だけでなく、最後は正しい英文を鉛筆で紙に書いていたこともよかったと思いました。
- ・ 「間違えてもいい」という安心感を生徒がもっているように感じました。教師の子どもへの態度、雰囲気がプラスに影響して、協働的な学習空間になっていました。「生徒を認める」、「ほめる」の大切さを再認識させられました。
- ・ スモールトークでは、多くの生徒が声を出して英語を話していました。これが当たり前になるように、自分の授業でも頑張って継続していきます。スモールライティングも始めてみます。

指導助言 <至学館大学教授 山田誠志先生>

第3回の授業研究会には、至学館大学教授山田誠志先生に来ていただき、指導助言を賜りました。

- 目的や場面、状況等の設定が適切であったため、生徒が主体的に書くことに取り組んでいる姿が見られた。
単元構成に工夫があり、単元の中で、終末の言語活動を意識した活動が複数あったため、生徒がスムーズに「書くこと」に向かっていた。
- 授業者が生徒に問いかけたことについて、生徒全員が考えられるようにすることが大切。学級全体で共有する前に、考えたことについて、「ペアで話す」ことを授業に取り入れることで、生徒全員を巻き込むことができる。



授業研究会での協議の様子